上野千鶴子に「弱者のための政治」を学ぶ

辻元清美

私には「おひとりさま」の大先輩が二人いる。

一人は土井たか子さん。一九九六年、現世田谷区長の保坂展人さんとともに、当時社民党党首だった土井さんに突然議員会館に呼び出され、「候補者になってほしい」と要請された。面食らった私が「……いつお返事をすればよいですか？」と問うと、「明日まで」とピシャリ。

私は迷いに迷い、ニュース23のキャスターだった筑紫哲也さんに相談しようと深夜のTBSスタジオに押しかけ、「護憲の火を絶やすな」と背中を押された。こうして私は国会議員の道を歩むことになった。

もう一人が上野千鶴子さんだ。上野さんとのつきあいは古く、「ピースボート」にも乗っていただいた。姜尚中さんや石坂啓さんらにも乗船いただいたクルーズで石垣島に寄港したとき、免許とりたてだった上野さんの運転で島内を一周。車に同乗した全員生きた心地がしなかった思い出がある（上野さんはご記憶がどうかわからないが）。とにかく、いつも颯爽としていた「千鶴子ネエ」は私たちの憧れだった。

上野千鶴子という社会学者は常に「現場」から発想し、「現実」を変えるため考え抜いたミッションを、鉄の意志で遂行する。その典型がベストセラーとなった『おひとりさまの老後』（法研、二〇〇七）だ。

当初私は、この本を手にとるのにためらいがあった。現状「おひとりさま」の私。五〇歳を目前に「このまま『おひとりさま』の大先輩・土井さんのような、政治に身も心も捧げる道を歩むのだろうか……」と悩んでいた矢先で、このタイトルを手に取るのは気恥ずかしかったのだ。発売から半年後、一歳年上のやはり「おひとりさま」の友人を誘い新宿の書店でようやく購入した。

しばらくして上野さんに会う機会があり、二つ感想を伝えた。

ひとつは、スタイリッシュな装丁に包まれ、発売後一年足らずで七五万部が売れたというこの本は、大変な「危険な本」であること。本の中では「フェミニズム」「ジェンダー」といった用語は慎重に避けられている。にも関わらず、これまであらゆることを家族単位で発想し制度設計してきた日本社会を、個人単位に組み替えてしまおう、という「起爆剤」が、さりげなく随所に埋め込まれているのだ。

現状維持で逃げ切ろうとする人たちにとって、既得権を無意味化されかねないこんなアブナイものが、全国津々浦々の書店の店頭に並んでいる。そして上野さんの講演には一〇〇〇人もの「善良」なファンが殺到し、周囲に『おひとりさまの老後』を薦めてまた読者が増殖する。その多くは「フェミの論客・上野千鶴子」を知らない層なのだ。これまで女性運動が働きかけてこなかったターゲットを狙い打つ、「ウィルス」の生存戦略のような効率的で巧妙なしかけ。

そしてもうひとつは、私たちより下の世代にとって、このシナリオは通用しないのでは、ということ。この本がブームとなった二〇〇七年から〇八年、高度経済成長時代につくられた日本の雇用・社会保障制度や成長モデルは完全に制度疲労を起こしていた。その象徴が〇八年暮れの「年越し派遣村」で、日本に存在する途方もない「貧困」を可視化した。家庭・地域社会・企業といった本来多層であるはずのセーフティネットが機能不全を起こしていることは、誰の目にも明らかだった。

だから団塊ジュニア以降の世代にとって、団塊世代は「好き勝手やって世の中を食べ散らかして、あとはよろしく」という無責任な人々に見えているんじゃないの。次の世代に対する私たちの責任を果たそうよ――と上野さんに呼びかけた。次世代のための「おひとりさまの老後」シナリオを考えよう、と。快く了承してくれた上野さんから出てきた「世代間連帯」というキーワードで、二人で対談・出版する運びとなった（『世代間連帯』岩波新書、二〇〇九）。

このときの仕事で、私は上野千鶴子に同居する厳しさと優しさを、あらためて思い知る。年金・介護・子育て、住宅政策からコミュニティビジネスまで、多岐にわたる議論のなか、どんな小さな違和感も上野さんは見逃さない。「それってどういうこと？」と執拗に追及し、納得するまで話題をうつさない。「これとこれは資料をあたって、これはもう一回組み立てて」と「宿題」はたまる一方。一日目、九時間議論しても予定の半分も進んでいなかったのではと思う。

二日目も異常に濃い密度と緊張のなか、夜遅くまでカンヅメ。全身のエネルギーを使い果たした私は翌日の早朝に血尿を出し、這うように病院に行って「極度の疲労とストレス」と診断された。一方の上野さんは夕食に鰻をご所望され、「これでな

いとだめなのよね」とお気に入りの山椒を持ち込みパクパク。本来スピーディーに出版されるはずの「対談本」は、一年がかりでようやく日の目を見た。上野千鶴子、恐るべし。

同時に、上野さんの学生への接し方に変化も感じた。いままでは「私も全速力で走るから、自力でついてこい」と、決して後ろを振り返らない印象だった。それが、なんだかやさしい。上野さんの研究室を訪れる学生たちは、扉を開けるときは傍目にもかわいそうなくらい緊張が見て取れるのだが、おずおずと上野さんと二言三言会話するなかで、ほぐれていく様子が伝わる。論文の指導を受けにきたはずが、いつの間にか身の上相談になっている。そして、来たときとはうって変わった晴れやかな表情で部屋を出て行くのだ。「私の研究室は学生の駆け込み寺になってるらしいのよね」と上野さん。

実は私自身、上野さんのところに「駆け込む」ことしばしばだった。議員辞職後メディアに追い回され心身ともにぼろぼろになった私を、上野さんは自宅に招いてくれた。そして「あんたの部屋はここにひとつあるんだからね」と念を押すように言われた。あのときの私も、研究室を出て行く学生と同じ表情をしていたのではないか。

上野さんが東京大学教授になったとき、大きなバッシングが起きたことを知っている。「上野は権力にすりよった」「牙を抜かれた」と、少なくない数の言説が、ここぞとばかりに上野さんの行動を批判した。しかし上野さんのそれからの活躍ぶりはみなが知るところだ。女性学の発展はもちろん介護の分野で「当事者主権」というコンセプトを提唱し、運動だけでなくその後の制度設計にも大きな影響を与えた。何より上野千鶴子が東大にいるということは、フェミニズムがこの国のアカデミズムの中枢にくいこんだことを、社会が認めたに等しいではないか。アカデミズムの「白い巨塔」に穴を穿つため、ある意味百の論文よりも大きな意味をもつ仕事を、上野千鶴子は自らの存在をかけて、たったひとりでやってみせた。こういうたたかい方があるということを、私たちに知らしめた。

そして今年、東日本大震災が発生した。三月一五日に行われるはずだった上野さんの東大での最終講義は延期され、六月に開かれた。ネットで同時中継されもしたし、多くの方が参加したので多くは触れないが、「生き延びるための思想」と銘打たれた講義は圧巻だった。

弱者の立場に置かれてきた女は強者になろうとするのではなく、弱者のまま尊重される社会を求める。女性学は弱者が弱者のままで生きられる社会をつくるための思想である。高齢社会がそうだったように、原発事故は誰もが弱者になりえることを教えてくれた――「私が先達から受け取ったように、みなさんにバトンを渡します」そう言い残して上野さんが講義を終えたとき、私は涙があふれた。

私は総理大臣補佐官として権力の中枢に飛び込み、もがきながら震災下の危機対応のまっただなかだった。いまの政治の限界に悩み、自分を追いつめていた時期だったせいもあるが、私もまたバトンを渡された一人だ、と強く感じたのだ。いったいどう受け取ればいいのか。

女性学が「弱者が生き延びるための学問」であるならば、「弱者のための政治」はどうあるべきか。土井さんが女性議員ゆえに求めた「強さ」、世間よりも男権社会度が高いこの永田町ではこれもまた真実。そして上野さん流のしなやかさ、したたかさ。この二つの教えを自分なりに咀嚼する必要があった。

そして私はその三カ月後、民主党に入党するという大きな政治的決断をした。

やはり「おひとりさま」の「戦友」である辛淑玉は、私の民主党入りを「汚染まみれのビフテキを食べる決断」と言い切った。そして、「安全で美しく見えるミネラルウォーターを飲むような、論理的に整理された『左翼』の生き方の中には弱者の生存空間がないことを、彼女は肌で知っているからだ。（中略）綺麗事を言わず、泥まみれになって権力にしがみつこうともがく彼女の背中には、おんぶ紐で背負った『弱者』がいる。彼女が政治をし続ける理由はそこにある」と、私のニュースレターに寄稿してくれた。辛淑玉が野中広務・元官房長官と対談を行い、批判と賞賛の両極端にさらされたことは記憶に新しい。彼女も例えようもない孤独のなかで、マイノリティのためにたたかい、傷つき、傷が癒える間もなく走り続けている一人だ。

震災と原発事故という人類史上最大規模の複合災害のまっただなかに、私たちはいまもいる。そして、震災前から日本には「孤族」という言葉が生まれるような社会状況が続き、私と上野さんが『世代間連帯』で模索したような社会制度の大変革がなければ、日本は子どもたちが未来に希望を描けない国になってしまう。私が上野さんにぶつけたように、「次の世代へのオトシマエ」をとらなきゃならない。理念を実現するために、くらいついてでも現実社会を変えるという「果実」をとろう。私に考え得る最大の戦略をもって。

上野さんを永田町に招いたとき、私のこの決意を口にした。「社民党はキライだけど、キヨミを応援してきた。民主党もキライだけど、キヨミは応援する」が、千鶴子ネエの反応だった。「あなた、危険な道よ」とも。そして「今度、私の家で『女子会』やろう。辛淑玉や石坂啓も呼ぼうか」と手帳を取り出して、パッとスケジュール調整をすませ、颯爽とお帰りになった。

私もいつか、上野さんのように「カッコいい姉御」になれる日がくるのだろうか。

（つじもと　きよみ・衆議院議員）